

実践的英語コミュニケーション能力の 向上を目指した指導

—新学習指導要領に即したカリキュラム構想に伴う授業実践プログラム—

A Study to Improve English Communication Skills in the Classroom

— Designing English Programs to Meet the New Ministry Guidelines —

森本 治子

(Haruko MORIMOTO)

1. はじめに

英語教育を考える上で、まず念頭に置くべきは、英語が事実上の国際共通語として機能していることだ。現代社会では、情報や資本の流れが国境を越えて活発になり、様々な面で急速にグローバル化が進んでいる。

平成10年12月に文部省告示により改訂された小学校学習指導要領では、小学校の第3学年から新たに「総合的な学習の時間」が設定された。その時間の中で、各学校が国際理解、情報、環境、福祉、健康など、従来の教科を超えた課題に対する学習を行うことができるようになった。平成14年度から実施された「総合的な学習の時間」に多くの学校は英語活動を導入した。また平成14年の「構造改革特別区域法」により、特区に認定された学校は、学習指導要領にしばられずに教育課程を編成できる特別研究開発学校として、英語教育を進めることができるようになった。平成16年に指定された教育分野の英語教育を推進する特区は、「群馬県太田外国語教育特区」以下22区であった。

さらに新学習指導要領の施行に伴い、全国の公立小学校(21,442校)では、「総合的な学習の時間」を活用して、初等英語教育が開始されている。平成20年度からは初等英語教育は必修化され、平成23年度より小学校5年生より週1時間「外国語活動」として実施される。平成21年4月の文部科学省の実施状況調査によると、小学校5年および6年で外国語活動を実施している学校は97.8%(20,978校、研究開発学校や教育課程特例校を含む)である。今後は、小学校と中学校の相互の連携強化が課題となり、また中学校と高等学校はこれまで以上の連携を重視していかなければならない。最終的には「小学校・中学校・高等学校・大学」を含めた一貫性英語教育が必要となってくるであろう。

本稿は、中学校・高等学校における実践的英語コミュニケーション能力の向上を目指した指導についての実践的研究報告である。目白研心中学校・高等学校における6年間の英語教育カリキュラム開発における検討を加えた。

Ⅱ. 中学校と高等学校における英語の指導目標

平成10年告示、平成14年度から施行された中学校学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取り扱い」において、必修教科としての「外国語」は英語を履修することが原則となった。第2次大戦後、中学校において外国語（英語）が初めて必修科目となった背景には、英語の国際共通語としての役割が挙げられる。さらに平成11年告示、平成15年度から施行された高等学校学習指導要領においては、外国語のうち「オーラル・コミュニケーションⅠ」または「英語Ⅰ」のいずれかを必修とすることが定められた。今後加速することが予想される国際化と情報化に対応するためには、英語の習得と使用が不可欠であると判断されたと言える。¹⁾

〔現行の学習指導要領（中学校）の総括目標〕

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

〔現行の学習指導要領（高等学校）の総括目標〕

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

それぞれの目標を構成要素に分けると下記のようなになる。

〔中学校〕

- (1) 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- (2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- (3) 外国語を通じて、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養うこと。

〔高等学校〕

- (1) 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- (2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- (3) 外国語を通じて、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養うこと。

(3) に関して、中学校では、特に音声によるコミュニケーション能力を重視している。「実践的コミュニケーション能力」とは、外国語（英語）の音声や文字を使って実際にコミュニケーション

ーションを行うことができる能力を意味している。これが教科としての外国語の究極的目標となっている。²⁾

平成20年告示の中学校新学習指導要領は、小学校において、特に音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーション能力の基礎の育成を踏まえて、外国語活動が導入された。中学校段階では、「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」を明示することで、小学校における外国語活動で身につけた基礎の上に、これらの4つの技能を総合的に育成することとしている。

さらに高等学校新学習指導要領は、中学校における外国語の学習の基礎の上に、互いのコミュニケーションにより、自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるように目指し、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」と結び付け、4つの領域の言語活動の統合を図るとしている。

中学校から高等学校へと発展的に扱われる実践的コミュニケーション能力の育成にあたっては、ことばが使用される「場面」「人間関係」「ことばの働き」「機能」が強く意識されなければならず、毎回の授業でこれをどう具体化していくことが大きな課題となる。実践的コミュニケーション能力の育成が英語科の中核目標となる。³⁾

Ⅲ. 新学習指導要領告示の背景

(1) 新学習指導要領「外国語」のねらい

平成21年4月に目白研心中学校に入学した中学1年生76名に関しては、約半数が小学校で英語教育を受けている。日本人教員と外国人外国語指導助手（ALT：Assistant Language Teacher）による音声を中心とした授業であったために、英語を聞き取る力はあるが、アルファベットを書いたり、英語を読んだりする力は定着していない。

中学校では、音声を重視し、生徒が積極的にコミュニケーション活動をする場面の設定を工夫した指導が行われている。しかし、今回の改訂の背景には、中学校3年間の英語学習において、コミュニケーションの中で、基本的な語彙や文構造を使う力が身につけていない、まとまりのある一貫した文章を書く力を身につけていないことが挙げられた。英語の重要性を認めながら学年進行と共に英語嫌いが増加している。

中学校から高等学校へ移行していくと、言語の使用場面や働きが自分に身近な初歩的な事柄を積極的に表現することから、さまざまな情報や相手の意向を理解し、自分の考えを的確に表現する内容となる。さらに自分の考えを整理し、論理構成を考え、伝達対象に応じた意思疎通の在り方を工夫しながら、実践的コミュニケーションの内容を向上させる必要がある。

新学習指導要領では、中学校では英語の授業数が週3時間から週4時間へと増加し、義務教育における英語の学習量は増加する。中学校で学ぶ語彙が「900語程度まで」から「1200語程度」までに増える。これは基本的なコミュニケーションをするのに900語では不十分であるという考えによる。語彙や文法の知識を定着させるとともに、それを実践的に使う力につなげ、

辞書についてもこれまで以上に積極的な活用を勧めている。

高等学校では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」ことを外国語の目標と定めている。中学校での学習内容の確実な定着を図り、高等学校での学習に円滑に移行させるための学習機会を設けること、4技能を総合してコミュニケーションの中で内容的にまとまりのある発信ができるようにすることが今回の改訂である。

新学習指導要領に即した科目編成（高等学校外国語科目）

現行の科目編成	新しい科目
英語Ⅰ* (3単位)	コミュニケーション英語基礎 (2単位)
英語Ⅱ (4単位)	コミュニケーション英語Ⅰ★ (3単位【2単位まで減可能】)
OCⅠ* (2単位)	コミュニケーション英語Ⅱ (4単位)
OCⅡ (4単位)	コミュニケーション英語Ⅲ (4単位)
リーディング (4単位)	英語会話 (2単位)
ライティング (4単位)	英語表現Ⅰ (2単位)
	英語表現Ⅱ (4単位)
*うち1科目必修	★共通必修

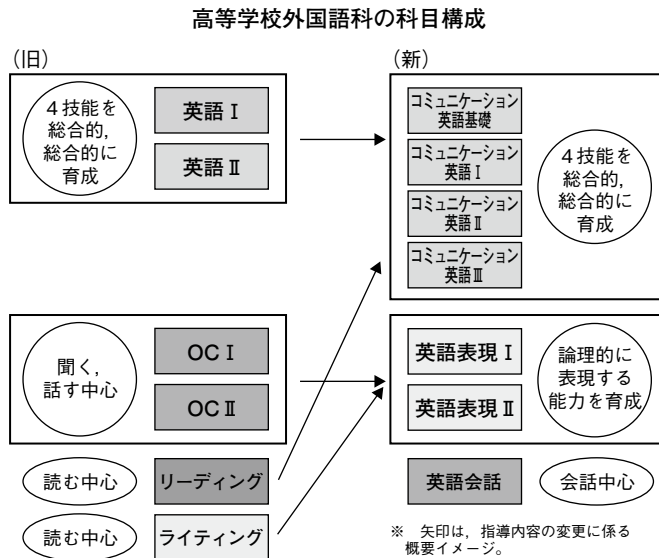
(三省堂英語教育リレーコラム http://tb.sanseido.co.jp/English/column/relay_bc/20090209.html)

新設の「コミュニケーション英語基礎」は、中学校と高等学校の学習を繋ぐことを目的としている。身近な場面や題材に関する内容を扱い、日常的な事柄についてのコミュニケーション活動を行いながら、中学校における基礎的な学習内容の定着を図る。

「コミュニケーション英語」は、現行の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」を再編し、4技能を発展的にコミュニケーション力育成へと導く科目である。英語の各科目では生徒が英語に触れる機会を充実し、授業を実際のコミュニケーションの場とするために、英語での指導を基本とする。現行では、文法・訳読が中心となり聞くことや話すことが十分に指導されないと指摘されていることを踏まえての改善である。「英語会話」は現行の「OC（オーラル・コミュニケーション）」の指導内容のうち、特にインタラクティブにコミュニケーションを行う能力を高めることを目的としている。

「英語表現」は、スピーキング、ライティングを中心に発信力を育成する科目として編成された。聞いたり読んだりした内容を踏まえて自分の考えを話したり書いたりすることを通じて、論理的思考力や発信力を養うことを目的としている。この科目では、現行の「OC（オーラル・

コミュニケーション)」「ライティング」の指導内容のうち特に、必要な構文・文を実際に運用して発信する力の育成が期待されている。豊富な題材に触れさせることも明記され、「コミュニケーション英語」をサポートする意味合いが濃い。⁴⁾

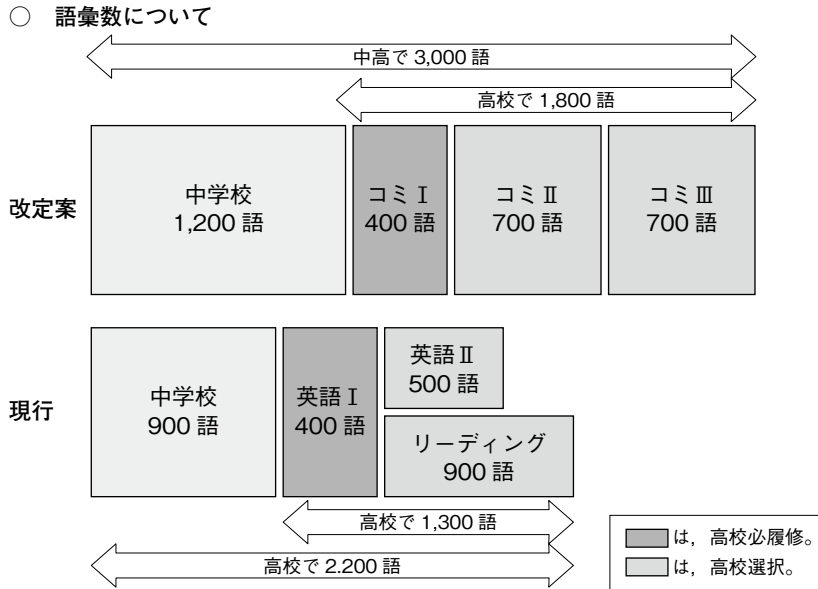


(文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/014.pdf)

(2) 語彙や慣用表現の充実について

「外国語教育の充実」を受けて、高等学校で指導する標準的な語数を、中学校で学習した語に「コミュニケーション英語 I」で400語の増加、「コミュニケーション英語 II」で700語の増加、「コミュニケーション英語 III」でさらに700語程度の新語を加えた数としている。中学校・高等学校を合わせて3,000語程度にまで増加する。改訂を重ねるごとに、指導できる語数が少なくなりすぎるという批判があり、意思疎通を十分行うためには増加が必要と判断された。

今回の改訂は、情報や考えなどを的確に理解し、適切に伝えるコミュニケーション能力を養うことを強く打ち出しており、文法指導の改善と共に慣用表現や指導すべき語数の充実も図られている。中学校では、指導語彙数が1,200語程度となるので、理論的にはこれまで高等学校で指導していた語彙の15～25%程度が中学校で既習済みとなる。高等学校ではさらに新しい語彙・慣用表現を加えて、より高いレベルのコミュニケーション能力を養っていくことが望まれる。



(文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/014.pdf)

中学校で平成24年度に新学習指導要領が全面実施されるのを受けて、高等学校外国語は25年度入学生から学年進行で新学習指導要領の実施となる。授業科目の編成などの根本的変更に加えて、学習者中心のコミュニケーション指導や、教師の英語使用のあり方等、大きな変革に備えて準備が必要である。⁵⁾ 以上をまとめると①辞書の活用、②内容的にまとまりのある発信、③インタラクティブなコミュニケーション力の強化が肝要であると言える。

IV. 外国語（第2言語）習得研究と英語教育

(1) 教室における英語使用の効果

Krashen (1982) は、第2言語習得のためには、理解可能なインプット (comprehensible input) に十分さらされることが必修条件であると主張し、言語の習得はインプットさえ十分であれば、学習者が意識しなくても可能であると考えていた。⁶⁾

そのためには、言語の規則性を発見させ、正しい文と誤った文の区別をさせて、学習者の意識の向上を図り、目標の言語項目に色を塗ったり、下線を引いたりして印象づけるなどのインプットの強化を行う。またコミュニケーション活動の中で、教師が学習者の誤りに対して修正フィードバックを与え、生徒の発話修正を促すことが考えられる。

[会話事例] (Teacher) What did you do during summer vacation?

(Student) I go to my grandmother's house.

(Teacher) Excuse me? Oh, you went to your grandmother's house.

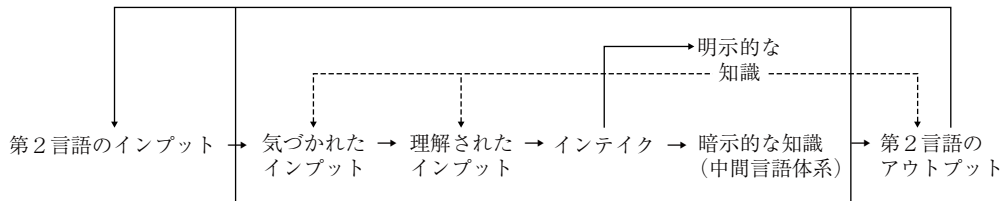
What did you do? Go to your grandmother's house?

(Student) I went to my grandmother's house.

(Teacher) Oh, that's nice. Where does your grandmother live?

しかし外側からインプットを与えるだけでは不十分で、学習者が自分の中間言語の体系の中に「インテイク intake = 取り込み」をする必要があることがわかってきた。それには、まず学習者が言語の構造的特徴に気づくこと (noticing) が不可欠であり、そのためには、学習者の注意や意識を特定の言語に形式に向けさせることが重要となる (Schmidt 1990)。次に気づかれた (noticed) インプットが理解された (comprehended) インプットに転換される必要があるが、そのためにはコミュニケーションの中で意味を理解し、必要に応じて形式にも学習者の注意に向けさせる意味重視型の指導法が考えられる。⁷⁾

インテイクの構造 (Ellis 1994) より



Krashenは、インプットのみが言語習得に関係すると考えたが、Swain (1985) はカナダのイメージングプログラムにおける研究から、インプットだけでは、学習者が高度な言語 (文法) 能力を身につけられないことをつきとめ、学習者が聞き手にとって理解可能なアウトプット (comprehensible output) をすることが、学習者の言語能力を発展させるとした。

これによれば、意図した意味を相手に正確に伝える必要があり、発話の修正が必要となった時に学習者は、自分の中間言語と目標言語の差異や、理解はできるが産出できない言語項目の存在に気づくという。Pica et al. (1989) によれば、タスクとしては、インフォメーション・ギャップやジグゾーなどが、ディスカッションより発話の修正を迫る効果がある。従って、インタラクティブなやり取りを強化する必要がある。⁸⁾

(2) 二つの異なる言語能力

Cummins (1979) は、カナダへ移民してきた子供たちの言語の研究を通じて、人間の言語能力には二つの異なる言語能力があると考えた。BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) で、日常生活で伝達内容を理解するために必要な「日常言語能力」である。学習活動のレベルで考えると、4技能の中で、特にリスニングとスピーキングがこの能力を支える。これに対してCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) は、より知的な作業を行うとき

に必要な「学習認知言語能力」である。4技能のうち、特にリーディングとライティングがこの能力を支援すると考えられる。

日常会話に必要なBICSはそれほど深い思考力を必要とせず、比較的早く学べて使えるようになる。ある一定のレベルまで習得してしまうとそれ以上学び続ける必要はない。それに対してCALPは、人間が新しい概念を創造し、新しい知識を吸収し続ける限り、学び続けていかなければならない。Cumminsがカナダへ移民してきた子供たちを調査した結果、BICSは2年くらいで母語話者と同じくらいになるのに対して、CALPは母語話者に追いつくまでには6年から8年かかると説明している。英語が使える日本人を増やすためには、中学校と高等学校を通してBICSとCALPの両方の育成が行われなければならない。そして中学校では、主にBICSの育成とCALPの基礎的訓練が行われるべきである。⁹⁾

小学校と中学校での音声を中心とした英語教育では、まずBICSの獲得が目標となる。BICSを有していなければ、CALPを用いることはできない。新学習指導要領では、生徒が英語に触れる機会を充実し、授業をコミュニケーションの場とするために、英語での授業を基本とすることで、BICSの定着指導とCALPの育成を同時に行うことができる。学年が上がるにつれて、BICSからCALPへの比重移動を行い、最終的にはBICSとCALPの融合によるコミュニケーション能力と学習者の自立性を高めることを目標とする。本稿でもこの考え方を取り入れている。

V. 目白研心中学校・高等学校における実践的英語コミュニケーション能力を伸ばす指導

(1) ACEプログラム

目白研心中学校（平成21年4月に目白学園中学校から校名変更）では、平成6年より15年間にわたり、本校独自のACE（Active Communication in English）プログラムにおいて、海外のテキストやオリジナルテキストを使用し、実践的英語コミュニケーション能力の育成を目指してきた。コミュニケーション・アプローチの基本的な考え方を取り入れ、教室での英語の授業をなるべく実際に言語でコミュニケーションが行われる場合に近づけて指導をしている。ロールプレイやペアワークを通じて、学習目標が現実的に役に立ち、学習を自発的に行わせる動機を与えている。教室での英語使用を増やし、お互いに自分のメッセージを相手に伝えようとして、聞き返したり、確認したり、言い換えたりしながら、互いの会話を理解しようとする過程で、言語能力が発達していく。

目白研心中学校では、ネイティブ教員によるACEの授業を週3時間設定し、各ホームルームを2分割し少人数制で授業を実施している。また中学校新学習指導要領への移行措置として、検定教科書の「New Crown English Series」（三省堂）を使用した日本人教員による英語の授業を週5時間設定し、ACEの授業と連携を取りながら総合的な英語力の定着を目指している。さらに今年度から語彙数を増やすことを目的にして、「Oxford Reading Tree」を教材とした多読指導を取り入れている。この多読指導は、図書館との連携により、中学1年ACEの授業で学習展開を行っている。

英語というツールを使って、世界の人々とコミュニケーションを取ることができる能力を育成するために、コミュニケーション的な言語の習得を重視したシラバスを用いている。ネイティブの教員と日本人の教員が、互いに連携を取ることでより英語の知識（語彙力・構文能力）をできるだけ効率的につけていくこと、そして学んだ知識の応用として、4技能を伸ばす教育方法の開発を積み重ねてきた。

ACEプログラムでは、「教室内での英語学習」（インプット）を実践の場である「体験型イングリッシュ・キャンプ」や中学校3年で実施される「カナダ修学旅行」（アウトプット）につなげ、定着を図っている。平成20年9月に中学校3年生52名に「英語学習について」のアンケート調査を実施した。具体的には異文化理解の向上（肯定的評価89%）、リスニング力の向上（肯定的評価85%）、カナダでの授業の理解度（肯定的評価85%）、英語コミュニケーション力の向上（肯定的評価67%）が挙げられた。生徒が語学や異文化への関心を深め、積極性とコミュニケーション能力を習得したことはアンケートの結果から明らかになった。¹⁰⁾ カナダで、ESLの専門の教員の「英語による授業」を過半数の生徒が理解できたことは、ACEの授業が生徒のBICS育成（日常生活に必要な会話表現、および機能表現の理解と使用）に役立ったと言える。特徴とするのは、BICSに力をいれていることである。

（2）「SELHi」（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）としての取り組み

文部科学省は、平成15年3月に『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を策定した。この「行動計画」の目標の一つに「英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る」ことが掲げられた。それに伴い、文部科学省は平成14年度に先進的な英語教育を推進し、優れた授業実践を普及するため「SELHi事業の推進」として全国で16校を指名した。目白学園高等学校は平成14年度から平成16年度までの3年間、第1期スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールに指定され、「総合的英語力に裏打ちされたコミュニケーション能力の養成を目指す教育方法の研究」を行った。

（目白学園高等学校 「SELHi」研究の内容）平成14年度～16年度

- ① 4技能を伸ばす教育方法の開発
- ② 英語教育を重視したカリキュラムの開発
- ③ 「英語で英語を教える」指導法の開発（高等学校英語コース「英語Ⅰ」、「Reading&Writing」、「Speaking Out」）
「Year Book」プロジェクトー英語の卒業文集をグループで作成
- ④ 英語以外の他教科を英語で指導する授業研究
（家庭科、音楽、数学、化学、国語、保健体育）
- ⑤ 海外姉妹校ほか海外の学校との効果的な連携と交流に関する研究
（交換留学、イギリス修学旅行、オーストラリア語学研修）

平成15年度「英語をツールとした他教科指導」実践内容一覧

教科	時期(高等学校2年次)	実践内容	結果
家庭科	夏休みから10月下旬	・調理実習と発表 ・英語圏で作られる一般的な家庭料理の実習と紹介	・外国と日本の食文化について比較し、日本の食文化の再認識ができた
音楽	各学期に2回程度	・英語の歌詞教材を通して音楽に親しむ歌唱指導を行った	・授業指導、進行をすべて英語で行い、音楽への理解が深まった
数学	2学期	・三角比—アメリカの教科書を併用し具体的な応用問題に多数触れる	・教材によって使用するものの相違点を実践的比較によって体験(アメリカでは関数電卓を使用)
化学	各学期に1回	・英文の教科書と実験書を使用し、食品の化学(炭水化物・蛋白質)について習得	・実験では英語の試薬名に興味を持ち真剣に取り組んだ
国語	2学期	・イギリス修学旅行事前学習—「夏目漱石の見た20世紀初頭のイギリスとそして今」 ・修学旅行時のインタビュー結果と漱石の感想を比較検討	・英語で日本紹介のスピーチを作成し、イギリスの学校で発表した ・イギリス社会における日本と日本人像の変遷について考えた ・イギリスの人々が日本をどう思っているかインタビューを通じてわかったことで自国について考えた
保健体育	各学期1回	・バイリンガル講師によるジャズダンスとエアロビクスの授業	・英語を理解して体を動かし、英語の語彙を増やすことができた

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールは、英語力をBICSレベルにとどめるのではなく、CALPレベルにまで高めるための英語教育を推進する取組みである。¹¹⁾ 最終的には、BICSとCALPの融合が必要との考えに立っている。

生徒の英語学習への意識について、アンケート調査を行った。その結果、「ネイティブ教員の話す英語が全て理解できる」生徒が67.2%、「英語が好き」が81%、「将来、英語を使う職業につきたい」生徒が53.4%など、英語に対する熱意と3年間の学習成果が読み取れる結果がでた。¹²⁾ 3年間の研究開発の成果として、英語や他教科の授業において英語使用を増やし、プレゼンテーションやプロジェクトを授業に取り入れたことで、生徒の学習意欲と英語力の向上が見られた。さらに他教科を英語で教えることにより、生徒に主体性と問題解決能力、グループ活動力が高まった。

〔TOEIC Bridge 3年間の結果の推移〕平成14年度～16年度

第1回 平成14年7月実施 受験者66名

第2回 平成15年2月実施 受験者67名

第3回 平成15年12月実施 受験者67名

第4回 平成16年12月実施 受験者67名

「SELHi」指定校期間の英語コース生 TOEIC Bridge受験状況

〈合計点〉180点

()内の数字は前回との差

	平14年度第1回	平14年度第2回	平15年度	平16年度
平均点	124.8	133.9 (+9.1)	138.9 (+5)	144.4 (+5.5)
最高点	172	174 (+2)	174 (±0)	174 (±0)
最低点	92	92 (±0)	74 (-18)	94 (+20)

〈Listening〉50問 90点

	平14年度第1回	平14年度第2回	平15年度	平16年度
平均点	66.8	70.5 (+3.7)	71.5 (+1)	74.5 (+3)
最高点	86	90 (+4)	90 (±0)	90 (±0)
最低点	46	50 (+4)	40 (-10)	46 (+6)

〈Reading〉50問 90点

	平14年度第1回	平14年度第2回	平15年度	平16年度
平均点	57.9	63.4 (+5.5)	67.3 (+3.9)	69.9 (+2.6)
最高点	86	86 (±0)	86 (±0)	86 (±0)
最低点	28	30 (+2)	34 (+4)	46 (+12)

3年間TOEIC Bridgeを受験させ、英語運用能力の変容を数値で捉え、CALPレベルを含む総合的な英語力の向上が見られた。

〈高等学校3年英語コース生の英検合格状況〉

平成16年3月

合格した最高級	人数 ()内は%
1級	0人 (0%)
準1級	3人 (5.0%)
2級	21人 (35.6%)
準2級	20人 (33.9%)

(3) 「自己表現力およびコミュニケーション力の育成」プログラム

① 新構想学校における取り組み

平成21年4月に目白研心中学校・高等学校としてスタートするにあたり、「自己表現力およびコミュニケーション力の育成」を目指すカリキュラムを開発した。新構想学校においては、「論理的思考力に基づいた確かな学力」、「豊かな自己表現力とコミュニケーション力」「国際舞

台で活躍できる語学力」の向上に重点的に取り組んでいる。CALPにおいては、第1言語（母語）と第2言語（英語）間に共通基底言語能力CUP（Common Underlying Proficiency）が存在するので、両言語間に相互の依存関係がある。BICSは第2言語（英語）のみの授業でも習得できるが、CALPは抽象的な言語能力が要求され、第1言語能力が第2言語能力に反映される。従って、日本語でしっかり思考ができる生徒は外国語を学ぶときは、単に母語と切り離して学ぶのではなく、その思考力を別の言語を学ぶ際にも活かすことができる。教科の連携を取り、日本語をきちんと身につけて、たしかに思考できる力を身に付けることが大切である。

新構想学校における教科の学習は、中学校・高等学校の6ヵ年一貫教育（高等学校からの進学者は最後の3年間にあわせる）を基本とし、この6年間を2年ごとのステージに分け、第一の時期を「基礎期」、引き続き「発展期」、そして最後を「完成期」とし、発達段階に最も適した形で学習活動を展開する。教科における学習の中に、自己表現力やコミュニケーション力を伸ばすための活動を意識して位置づけて、教科の学習を通して、自分の考えを論理的に推し進め、適切に表現する力を育成していくことを目指すものとする。そのために、BICSとCALPの融合を目的としたカリキュラムを組んでいる。

目白研心中学校・高等学校 ラーニング・デザイン

	1 st ステージ		2 nd ステージ		3 rd ステージ	
	中1	中2	中3	高1	高2	高3
Learning Design	習得期		応用期		創造期	

② 「英語」における取り組み

目白研心中学校・高等学校の英語教育においては、各科目で連携を取り、英語の知識（語彙力、構文力）を効率的につけていくこと、そして、「聞く、話す、読む、書く」の4技能をバランス良く伸ばし、表現力ならびにコミュニケーション能力の育成を目指すものとする。さらに、生徒にCreative Writing用のノートを中学1年時から持たせ、日常的に英語を書かせる。このCreative Writingの活動を通して、自分の表現したいことを英語で発信していく力を育成する。

平成21年度目白研心中学校・高等学校シラバス参照 中学校英語担当 森本治子

ステージ	学年	指導項目	学習活動
第1ステージ 習得期 BICSの基礎を築く	中学1年	・Creative Writing	<ul style="list-style-type: none"> 好きな場面を絵に描き単語または文をそえる「私の家族・友達について」 有名人・歴史上の人物になって自己紹介（発表を含む） 英文絵日記（林間学校で思い出に残ったことについて） 創作のノートにCreative Writing（文法・スペル）

実践的英語コミュニケーション能力の向上を目指した指導

ステージ	学年	指導項目	学習活動
第1ステージ 習得期 BICSの基礎を築く	中学1年	・ Creative Writing	<ul style="list-style-type: none"> リングミス等を気にせず思っていることを絵や切抜きを活用して自由に表現する) ・スピーチライティング「My First Year at Mejiro Kenshin」(校内スピーチコンテストで発表) ・正月を説明 写真(絵)と説明文
		・ Interactive (体験型) English Camp	<ul style="list-style-type: none"> ・林間学校にむけての事前指導を兼ねたイングリッシュ・キャンプ 目的：林間学校にむけて必要な英語の学習をする (コンピュータを使ったキーボードの練習 キャンプファイヤーソングの習得、日常的な会話について) 期間：7月下旬 3日間(校内) ・林間学校でのイングリッシュ・キャンプ(志賀高原において) 目的：自然の中での生活や自然観察を通じて実践的な英語を学ぶ (キャンプファイヤー、ホットドッグロースト、トレジャー・ハント—英語で日誌を書き、学習した事項についてハンドブック(小冊子)に記入) 期間：7月下旬 3泊4日
	中学2年	・ Creative Writing	<ul style="list-style-type: none"> ・学校やホームルームの紹介 ・海外への手紙、課題作文 ・カナダ(ウェスト・バンクーバー)について調べる ・スキット「A Pot of Poison」「Zobra's Three Promises」、スピーチライティング「My Dream」(校内スピーチコンテストで発表) ・英語の俳句を作ろう
		・ Interactive (体験型) English Camp	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校2年冬期イングリッシュ・キャンプ 目的：異文化体験と実践的英語コミュニケーション能力の育成—英語を使った様々な活動を通して日常生活に必要な英語を学ぶ 日本と外国のマナーの共通点や相違点をゲームやディスカッションを通して学ぶ 「世界のクリスマス、また祝日」について 期間：12月中旬 3日間(校内)
第2ステージ 応用期 BICSをベースにCALPの育成を図る	中学3年	<ul style="list-style-type: none"> ・ Creative Writing ・ Canada School Trip 	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダ修学旅行事前指導 ・日本の文化・料理について紹介(発表を含む) ・ホストファミリーへの手紙 ・カナダ修学旅行についてのポスター作成(個人) ・スキット(グループで作成)、スピーチライティング「Change and Challenge」(校内スピーチコンテストで発表) ・ジャーナルライティング

ステージ	学年	指導項目	学習活動
第2ステージ 応用期 BICSをベースに CALPの育成を 図る	高校1年	・ Creative Writing	・「英語Ⅰ」—レッスンごとにFeedback Writing → 優秀作品を印刷物に、またはクラス発表
		・ Cultural Studies	・ 英語俳句制作（林間学校での自然体験をもと に夏休みの宿題）コンテスト応募と文化祭展示 ・ 外国人に日本を紹介
第3ステージ 創造期 BICSから CALPへの 比重移動 最終的には 融合を図る	高校2年	・ Creative Writing	・「英語Ⅱ」—レッスンごとにFeedback Writing または週に一度、社会的に話題になっている 事項についてジャーナルライティング （ネイティブチェック）→ 優秀作品を印刷 物に、またはクラス発表
		・ Speech	・スピーチライティング（夏冬休業中の課題の 優秀作品はコンテストに応募）→ 校内で も発表
	高校3年	・ Creative Writing	・ Writingの授業を通して、身近な内容について 意見を書き留めていく ・ 記事をまとめて新聞発行 → 文化祭展示 ・ 大学のエッセイコンテスト英語部門への応募 （国語科との連携）
		・ Presentation	・ プレゼンテーション → 自分の進路に関し た内容または興味ある分野について英語でプ レゼンテーションをする ・ 情報科とも連携し、パワーポイント等を有効 に使用して、発表

中学校で平成24年度に新学習指導要領が全面実施されるのを受けて、高等学校外国語は平成25年度入学生から学年進行で新学習指導要領の実施となる。新学習指導要領に明示されている「授業は英語で行うことを基本とする」には、英語使用のレベルについては、触れられていない。また、どの程度まで英語で授業をするかについては、学校の判断に委ねられている。本来の目的は、教師が英語で授業を行うことではなく、生徒が英語に触れる機会を十分に提供し、英語の授業を実際のコミュニケーションの場面とすることである。英語教師は、BICS育成のために言語活動を行い、またCALP育成のために英語をツールとしてコンテンツを教える場合にも、いかに効果的に英語を使用したらいいかを吟味する必要がある。上記プログラムについては、今後教科会でさらに検討を重ねていく。

V. まとめ

英語教員としての役割を考えると、生徒たちが将来、職業や日常生活で、英語を必要とする場面において使えるようにすることである。たとえばインターネットを利用して読む力、書く力、そして対話を成立させられるだけの聞く力、話す力の育成が必要である。学習指導要領の改訂を重ね、授業時間や内容が充実しても、学校で教えられることには限りがある。重要なのは、生徒たちが自ら学ぶ力を身につけられるように授業を工夫し、生徒の学習意欲を高めるこ

とである。また継続した学習を可能にする自立性を養成する必要がある。

そのためには、本校の「ACEプログラム」での体験型学習、また「SELHi」指定校として、「英語」や他教科を英語で教える取組みが有効であると言える。

外国の人々と相互理解を深めるには、まず共通の言語でコミュニケーションを取ることが必要である。英語を使ってコミュニケーションを取るのには英語を母国語とする人々だけではなく、完璧な発音である必要はない。重要なのは、自分の意見が言えるような英語を習得することである。

外国語の習得と良好な人間関係を築く過程には、共通点が見られ、互いに努力して、時間をかける必要がある。英語は日本語として捉えずに、直接情報や意見を交換する貴重な手段である。日本語と英語の言葉の壁を乗り越えるには、積極的に英語を使用することが重要である。日本の放送局が流す情報量と海外の英語放送局が流す情報量には圧倒的な違いがあり、報道の見方も異なる。日本が今国際的におかれている状況を考えると、スピードを重視するグローバル化へ対応した具体的な対策として、「小学校・中学校・高等学校・大学」の連携を通じた英語運用能力が高い人材の養成が期待される。

そのためには、本稿で提言しているように体験型学習、プレゼンテーション、プロジェクトを授業に取り入れ、英語の語彙の強化とインタラクティブにコミュニケーションを行う能力を育成していくことが必要であると考えられる。

【注】

- 1) 伊村元道、茂住實男、木村松雄編著 「あたらしい英語科教育法 小・中・高校の連携視座に」学文社、2008年 p8
- 2) 土屋澄男、広野威志著 「新英語科教育法入門」研究社、2007年 p7
- 3) 伊村元道、茂住實男、木村松雄編著 「あたらしい英語科教育法 小・中・高校の連携を視座に」学文社、2008年 p16
- 4) 金子朝子 「第17回 リレーコラム 新高校学習指導要領を読む」三省堂、2009年
- 5)-6) http://tb.sanseido.co.jp/English/column/relay_bc/20090209.html
- 7)-8) 望月明彦編著 「新学習指導要領にもとづく英語科教育法」大修館書店、2005年 p97
- 9) JACET教育問題研究会 「新英語科教育の基礎と実践」くもん出版、2003年 p165
- 10) 森本治子 「目白学園中学校における国際理解教育の取り組み」目白大学短期大学研究紀要第45号 目白大学短期大学部、2008年 p188-189
- 11) 吉田研作 「新しい英語教育へのチャレンジ」くもん出版、2003年 p69
- 12) 目白学園高等学校 「平成16年度 第3年次 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) 研究開発実施報告書」目白学園高等学校、2004年3月

【参考文献】

- ・小寺茂明・吉田晴世編著 「英語教育の基礎知識」大修館書店、2005年
- ・JACET教育問題研究会 「新英語科教育の基礎と実践」三修社、2007年
- ・望月明彦編著 「新学習指導要領にもとづく英語科教育法」大修館書店、2005年
- ・吉田研作 「新しい英語教育へのチャレンジ」くもん出版、2003年